# 輪の会

広島県

1966年に広島市の理・美容師によって設立された奉仕グループ。障がい者施設の職員から利用者を理・美容院に連れていくのにとても苦労されていると聞いて、近隣の理・美容師に声をかけ活動が始まった。月に４日の少ない休みのうち１日をボランティアに費やし、当初交通費も自腹だった。同県内の肢体不自由児入所施設若草園と広島平和養老館に毎月１回無料のヘアカット訪問ボランティアを続け、今年で52周年を迎える。これまでに443人のボランティア会員が述べ３万人の髪の毛をカットしてきた。

名誉会長
**寺岡　昇**

この度は社会貢献支援財団より、私達、広島理容美容奉仕グループ輪の会が長年の奉仕活動ということで表彰して戴きまして、誠にありがとうございました。

会の活動を一生懸命している３人のメンバーと共に出席させていただきました。ありがたいことです。今回の出席により日本全国いろんな処で社会のために活動されているグループ、個人の方がおられることを、改めて知ることができました。

私は式典リハーサルのとき、段上で表彰状を広げて立っているとき客席を見つめながら涙が出そうになりました。これが本番の時、まだ興奮するのではと思いました。

実は輪の会は、昭和50年12月「財団法人　日本顕彰会」より笹川記念館で結成10周年の時に表彰して戴きました。笹川良一会長より目録をいただき、その副賞50万円で肢体障害者施設「若草園」、老人介護施設「広島平和養老館」に奉仕道具を買わせていただきました。当時、両施設より大変喜ばれたことを覚えております。この度の受賞も中国新聞に載り、早速、喜んでいただきました。両施設の古くなった道具も買い替えようと思います。

今回は42年ぶりに表彰して戴き、前回は１人でしたが、会員４人で出席できましたこと、良い思い出になりました。両施設の方々も輪の会のメンバーが奉仕日に来ることを大変、喜んでいただいております。

輪の会の奉仕は「県立若草園」の模様を写した写真展を見た、ひとりの若き美容学校生が花をもって施設に慰問したことから始まりました。園長先生が「いろんな方にお願いしても続きません。職員で子供たちの頭をするのは大変なのです」と現状を話され、私にできることならと同級生や店の先輩などにお願いして、園に行くことになったのです。

昭和41年４月に理容美容に従事しているメンバーで「わたしに出来ることなら、輪

になって」と輪の会が結成されたのです。３年後もう一ヶ所と広島平和養老館にも行くことになりました。あれから51年、輪の会の、輪が繋がって、繋がって現在に至っております。現在会員数20名です。

今回戴いた副賞を自分たちのために使ってくださいと言って頂きました。奉仕道具のほかに年４回のリクレーション、会員で旅行、輪の会結成55周年行事など輪の会に携わった多くの方々のために有益に使わせて頂こうと思っています。

この度は誠にありがとうございました。心から御礼を申し上げます。

名誉会長　寺岡　　昇

▲輪の会結成51周年記念パーティー

▲昭和44年　秋のレクリエーション

▲昭和45年11月　石ケ谷峡　秋のレクリエーション

▲昭和47年２月　若草園

▲昭和47年２月　若草園での奉仕

▲昭和47年５月　若草園

# 特定非営利活動法人　カコタム

北海道

北海道札幌市内で、経済的な理由や家庭環境によって十分な学習環境にない子どもたちを対象に学習支援を行っている。2011年から高橋勇造さんが学習ボランティアを開始し、2014年に法人化。スタサポ事業と呼ばれる、主にひとり親家庭、親が病気の家庭の子どもなどを対象にしたマンツーマンの学習支援に最も需要がある。この他、市内の高校の授業をサポートするスクールサポート事業や学び直しを支援するリラーニング事業、１回100円で利用できる「ゆるきち」という中高生のオープンスペースを運営している。

理事長
**高橋　勇造**

この度は栄誉ある賞を頂きまことに光栄に思います。この賞は今まで活動に参加したメンバー、応援していただいている方々とともにいただいた賞だと思います。ありがとうございます。

NPO 法人 Kacotam（以下カコタム）は、経済的理由や家庭環境等により十分な学習環境にない子どもたち・若者を対象に学習支援をしています。学校教育や学校外教育、普段の生活体験から得られる学びを含めた学びの機会格差問題を解決のため、「環境に左右されない楽しい学びの場をすべての子どもたち･若者へ」を使命としてます。主に児童養護施設やファミリーホーム、母子生活支援施設等の児童福祉施設の子どもたち、ひとり親世帯、生活保護世帯の子どもたちと学習を通して関わっています。

私はこの活動を始めるまで児童福祉や教育とは無縁の生活を送ってきましたが、学生のときの家庭教師がきっかけで子どもの様々な社会問題に関心を持つようになりました。その後一般企業に入社するのとほぼ同時に私個人で活動を始めました。2012年１月に任意団体カコタムを立ち上げ、今までお互いに面識がなかった20名のメンバーとともにいちから活動をかたちにしていきました。その当時、関わる子どもたちは全体で10名ほどでしたが、徐々に口コミやマスコミに取り上げていただけたことで認知されるようになり、現在はメンバー122名、関わる子どもは年間延べ3,400名となりました。

2016年４月には「目前の課題を解決しながら、いかに子どもたちの“やりたい”を見つけて､カタチにすることができたのか｡」と学習支援の成果を団体内で定めました。宿題や友達との関係による悩み、私立高校の進学資金など目前の課題を一緒に解決しながら、どのようなことが好きで、どのようなことに興味があるのかを知り、子どもがやりたいことの具現化していくことを大事にしています。また、子どもと学習を通

して関わっていくなかで、子どもたちが良い状況のときも、悪い状況のときも、目前にいる子どもを受け入れ、そのような日々を積み重ねていくことで、子ども自身が良い状況のときも悪い状況のときも、ありのままの自分を受け入れられるようにつなげていくことを念頭において子どもと関わっています。

現在に至るまでに多くの方々から助けていただきながら、子どもとの関わりや団体運営における様々な課題を乗り越えてきました。今後も困難なことがたくさんあると思いますが、この賞を励みに活動に努めて参ります。

理事長　高橋　勇造

▲エルプラザ拠点における学習風景（メンバー、子ども１対１場面）

▲エルプラザ拠点における学習風景（全体）

▲カコタイム「膜の科学」

▲ねっこぽっこのいえ拠点における学習風景

▲へるすたでぃ拠点における学習風景

▲自然体験学習

# 特定非営利活動法人　グリーンバード

東京都

2002年に誕生した原宿表参道発の参加型ボランティアプロジェクトで、街の清掃、「ゴミのポイ捨てカッコ悪いぜ！」PR活動、企業や団体等のコラボレーション活動を行っている。街のおそうじ活動は現在、国内外85チームとなり、チームごとに定期的な清掃活動を行う。2007年にはフランス・パリにも波及し、開始当初は街の清掃に対する考え方の違いから奇異な目で見られたりもしたが、今では参加者の9割がフランス人で活動している。また海の日に大々的に行れる清掃プロジェクト「海の日ごみゼロアクション」の開催や毎月どこかで行われるイベントに参加して行う「イベントそうじ」なども開催している。

理事長
**横尾　俊成**

諸先輩方とともに栄えある賞をいただき、身が引き締まる思いです。授賞式は緊張しましたが、前日の懇親会も含めて他の多くの団体の方々と交流することができ、気持ちがほぐれたのと同時に、「社会のため」と頑張っていらっしゃる皆様の話を聞き、頭が下がる思いでした。関係者の方々、審査員の方々、そして私たちを日々サポートしてくれている方々に心から感謝申し上げます。

私たちNPO法人グリーンバードは、「ごみポイ捨てカッコ悪いぜ」を合言葉に、原宿・表参道ではじまったごみ拾いのプロジェクトです。2002年にスタートしてから15年になりますが、今では国内に75チーム、海外に10チームまで広がり、年間33万人の参加者とともに日々活動するコミュニティになりました。町会・自治会等の高齢化が叫ばれている今日この頃ですが、私たちの活動は20～30代の若者を中心に広がり、今では昔ながらのご近所コミュニティに若者をつないでいく役割も果たしています。参加者は商店街の盛り上げ役や、お神輿の担ぎ手となっているほか、時には耕作放棄地を保全する役割も担っています。

ごみは、拾っても、拾ってもなくなりません。拾っているだけだとすぐにまた捨てられます。ごみを捨てる人を減らさなければ、まちは一向にキレイになりません。では、どうすればいいのでしょうか。それは、①ごみを拾っている人をまちの中で目立たせることです。ごみ拾いをしている人が目立つ場所では、人はなかなか捨てられません。そしてもう一つ。②「ごみ拾いを一度でもしたことがある人は二度とポイ捨てしないの法則」を利用することです。一度でもごみ拾いをした人は拾う人の気持ちが分かるから、二度とポイ捨てしません。だから、私たちはまちでとにかく目立ち、多くの人を巻き込んだ活動を意識しています。ナイキやキッザニアのビブス、タワーレコードや博報堂の軍手、そしてコカ･コーラやJEEP、大都技研のごみ袋を持ち、カッ

コ良さを一番の売りにして、私たちは一年中、毎日どこかで活動しています。

2020年、いよいよ東京にオリンピック・パラリンピックがやってきます。現在、「日本のごみ拾い文化を海外に発信しよう」とフランスやアメリカ、スリランカなどにチームを展開していますが、数年後に迫るオリンピックでは、国内外のチーム、そして海外からの多くのサポーター、カッコいい企業の人たちとともに、スタジアムや沿道などをキレイにできればと思っています。ボランティアの力でピカピカになった街で、おもてなしできたら最高だと思います。

感謝と誇りを忘れず、これからも活動をしていきたいと思います。この度は本当にありがとうございました。

理事長　横尾　俊成

▲多世代が参加！代官山チーム

▲アメリカ・カリフォルニア州　アナハイム

▲「コドモ海フェス」海のごみ問題をテーマにしたフェスを開催！

▲海外では現在10チームが活躍中！今後さらに増やしていきます

▲子どもから大人まで世代を超えて、みんなで街をキレイに！

▲時にはカヌーに乗って、川に流れるごみだって拾います！

# 認定NPO法人　フローレンス

代表理事
**駒崎　弘樹**

東京都

子どもの病気で欠勤したことが原因で勤務先を解雇された女性がいると聞いた駒崎弘樹さんが、「子育ては親だけがするものではなく、社会みんなで関わるべき」という理念の下、2003年から活動を開始したNPO法人。日本初の試みの、病気の子どもを保育スタッフが家庭を訪問してケアする「訪問型・病児保育サービス」事業を開始した。また待機児童問題には、「定員20人以上でなければ認可保育所を作れない」といった規程を逆手に取り小規模保育所「おうち保育園」をオープンさせた結果、この取り組みをモデルとして制度化された「小規模認可保育所」が国の認可事業となった。その他、障がい児保育問題、ひとり親家庭の貧困問題、孤（子）育て問題などを解決するための「モデル」を作って実践し、全国に波及させ、地域の力で子育てと仕事を両立できる社会づくりを目指し、共働きやひとり親の子育て家庭をサポートする取り組みを行っている。

このたびは、栄えある「社会貢献者表彰」をいただき心より御礼申し上げます。

私たちは「みんなで子どもたちを抱きしめ、子育てとともに何でも挑戦でき、いろんな家族の笑顔があふれる社会」の実現を目指すNPO法人です。

テレビドラマ化された漫画「37.5℃の涙」のモデルにもなった日本初の訪問型病児保育事業からスタートしたフローレンスは、2004年に設立後、子育てや保育に関わる社会問題の解決モデルを次々に事業化する一方、全国規模で問題解決が推進されるよう行政への働きかけを行って参りました。

事業のきっかけは、いつもたった１人の悲痛な声を聞くことから始まっています。

「こどもの看病のために仕事を休んでいたら、会社をクビになりました」というお母さんの声。

「保育園に預けられず、育児休業から復帰できません。フローレンスを辞めなければならない」というスタッフの声。

「障害のある子どもを預かってくれる保育園が、どこにもありません」という保護者の声。

「生まれたばかりの赤ちゃんが自宅出産や遺棄で亡くなっている」という連日の報道にアクションを起こさずにいられなかったことがきっかけであった事業もありました。

現在、子どもが病気になった時に預け先がなく、子育てと仕事の両立を困難にする病児保育問題を解決するための「病児保育事業」、そして待機児童解消のため開園した「おうち保育園」が、小規模認可保育所のモデルとして国策化された「保育園運営事業」、日常的に医療的なケアを必要とする障害児を受け入れる保育園がないという障害児保育問題の解決を目指す「障害児保育事業」、赤ちゃんの虐待死ゼロを目標とし子どもの家庭養護を推進する「赤ちゃん縁組事業」など、数々の事業を展開してい

ます。

2017年には、病児保育室・障害児保育園・認可保育園・小児科が一体となった日本初の保育複合施設「おやこ基地シブヤ」の開園や、経済的に厳しい環境にある子育て世帯にアウトリーチする「こども宅食」プロジェクトを立ち上げるなど、新しい挑戦を続けています。

「親子の笑顔をさまたげる社会問題を解決する」というミッションを掲げ、制度から取り残されている課題に光を当て続けていくこと。こうした活動には事実、高い壁が幾重にも立ちはだかります。貴法人が、私たちの地道な活動を評価して下さり支援して下さったことは、各現場で日々奮闘しているスタッフの心を勇気づけ、新たな挑戦を続けていく原動力となりました。

一同より、感謝を申し上げます。

代表理事　駒崎　弘樹

▲小規模保育事業

▲赤ちゃん縁組事業もしています

▲病児保育中

▲ヘレン　おうち保育園との交流場面

▲障がい児保育ヘレン

# 上原　淳

川越救急クリニック
院　長

埼玉県

埼玉県は全国の中でも人口に対して医師が少なく、しかも救急病院は年々減少している。川越市内の高度救命救急センターで勤務していた上原医師は、軽症や中程度の患者が次々と運ばれ、同センターが本来診るべき重度の患者に集中できない現状から、救急体制はつぶれると危機感を抱き、2010年、初めて個人で救急専門病院「川越救急クリニック」を借金をして同市に開設。他の医療機関が外来に対応しない午後4時~22時に診療所を開け、その時間帯を過ぎても、夜間や早朝、自力で来る患者や、専門医がいないと救急病院に受入拒否された救急車を受け入れている。搬送されるほとんどの患者がその日に帰宅できる軽度だが、救急医療の現場は医師の長時間労働で疲弊している所に、軽症から重篤の患者が次々と運び込まれ、相応の医療が受けられない事態になりかねない事から、地域で軽度や中程度の急患を受ける仕組みが必要だと上原医師は訴える。救急病院での救急車の受入平均件数が年間750件に対し、同クリニックでは1800台を受け入れている。この救急クリニックのシステムについて、看護師等医療関係者からの賛同も多く、NPO法人を設立し、講演等を通じて普及に取り組んでいる。

このたびは、栄えある賞をいただき、ありがとうございました。

私は、埼玉県川越市に、川越救急クリニックという、ER型救急医療機関を開設し、休日・夜間の救急診療を行っています。首都圏、関西圏の郊外では、人口当たりの医師数が不足しており、救急の受け手が少なく、軽症患者から重症患者まですべてが3次救急機関（救急救命センター）に集中する傾向にあります。その結果、3次救急機関が軽症者に手を取られ、本来の機能が果たせず、地域の救急医療が崩壊の危機に面しているのです。

また、中等症以下の患者を受け入れる2次救急医療機関には、全身の広範囲な診察が出来る救急医や総合診療医はいません。その日の当直医が救急診療を受け持っていますので、自分の専門以外の患者は受入れないことが多いのです。

そこで私は、勤務していた救命救急センターを退職し、2010年に休日・夜間の救急初療に特化した川越救急クリニックを開業し、3次救急医療機関が本来の機能を果たせるようにしました。

現在我が国は世界でも類のない高齢化を迎えています。高齢者の多くが持病を抱えており、健康への不安とともに生きています。人間の不安は夜に強くなります。ちょっとした体調不良がきっかけで不安が強くなり、夜間医療機関を受診する高齢者がたくさんいます。彼らの受け皿として、救命救急センターや地域の基幹病院が受け入れるのはナンセンスです。

医療、特に救急医療はライフラインの一つと言っても過言ではなく、地域の救急医療が崩壊すると、そこでの生活が厳しいものになります。ER型の救急クリニックが

存在することで、地域の救急システムがうまく回り始めます。今後も日本の救急医療を崩壊させないためにも、日々の診療とともに、救急クリニックを全国に広める活動を続けていきます。

今回、表彰式に出席して、数多くの方々が独自の取り組みを行って、社会貢献していることを知りました。一つ一つの取り組みに感心・感動したのですが、それとともに、「誰かを笑顔にしたい」、「誰かの支えになってあげたい」、「社会を良い方向に変えていきたい」という皆さん共通の想いを強く感じました。もちろん私もそういう想いを持って医療を続けていますので、「ああ、全国に、こんなに多くの同志がいるんだ」と非常に心強く、そして大変うれしく感じました。こういう志をもっと多くの人に広げて行けたら・・と思いますし、自分の活動が誰かの次の活動のきっかけになると良いなあと思います。今回は本当にありがとうございました。すべての受賞者、すべての財団関係者のみなさんに御礼申し上げます。

▲日本救急クリニック協会を発足させた

▲診察中

▲川越救急クリニック

# 特定非営利活動法人　CCV

栃木県

栃木県鹿沼市で、当時小学校教諭だった福田由美さんが、教室で落ち着いていられない子や集団生活が苦手な子が増えたと感じ、発達障がいについて学び、個別指導をしていたところ、指導を受けていた子と受けていなかった子では中学校進学後に違いが表れていたことがその後の調査でわかった。小学校で現れる不適応のサインを見逃さず対応することが重要と考え、教員をやめて自宅で学校に適応できない子の居場所を作り、その後2009年にかつての教え子の保護者とともにCCVを設立した。現在、フリースクールから就労継続支援B型事業所、グループホーム等障害福祉サービス事業所を行政と地域ボランティアの協力を得て運営している。

理事長
**福田　由美**

過日は過分なるおもてなしと表彰という栄誉をいただき大変感謝しております。

また、様々な他の社会貢献団体の皆様と出会い、交流することができ、皆様の取り組みとその情熱に深く感銘を受けました。毎年このような社会活動に光を当て、励ましのエールを送る活動を続けていらっしゃる社会貢献支援財団の皆様に改めて感謝いたします。

さて、私はかつて小中学校の教員をしている中で、様々な理由で、不適応を起こし、学校に行けなくなる発達障害の子どもたちと出会い、今の読み書きと一斉指導中心の教育現場に疑問を感じました。多様な学び方が必要な発達障害児に対して今の学校制度は教員数、カリキュラムともに追いついていないと感じています。今でも毎年12万人の不登校児童生徒が出現し、本人や保護者の苦しみは続いています。学校の中では不適応を起こす彼らが、地域の塾や習い事、居場所では生き生き学んでいる姿にも多く出会いました。学校を離れ、地域の居場所で学習すると集中して取り組むことができる生徒もいました。好きなことについてプロから学ぶとまるで別人のように天才的な力を発揮する生徒もいました。すべての子どもたちが安心して学ぶことができるような仕組みを作りたいと思い、自宅に居場所を作り、興味関心から学びたいことを選び自発的に学んでいくフリースクールを作りました。

そこで育った子どもたちはさらに就労先が必要でした。障がい者の働く事業所を保護者の方たちと立ち上げるためNPO法人を作りました。そして、さらに共同で暮らす場所としてグループホームやシェアハウスをつくり、一人一人が自己実現し、学び、働き、暮らす仕組みができ地域の中に認められる存在となることができました。今では高齢者支援施設とも連携し、共に暮らす地域包括ケアシステムに参画し、行政と共に新しい多様な暮らしをデザインする立場になりました。

また、最近は子どもの貧困問題のネットワークを作って解決に向け奔走しています。今年度はこども食堂や子どもの学習支援事業の運営を任されるようになり、孤食を防ぐ取り組みについて地域会議を持ち、食材調達、ボランティア不足などの問題解決にむけて協力者や賛同者を増やす活動を続けています。

豊かであるはずの日本の子どもたちが一人残らず心豊かな人生を送れるようにこれからも多くの人たちと手を取り合い、共に考え行動していきたいと思います。

理事長　福田　由美

▲カフェ経営

▲ゴルフ指導

▲沖縄自然体験学習

▲東日本大震災復興支援農業

▲CCV 学園高等部卒業式

▲CCV まつり

# 臼杵　尚志

香川県

北アルプス最奥部の夏季山岳診療所「三俣診療所」で、1977年からボランティア活動を40年間にわたり続けている。この活動は岡山大学の医学生が1964年に始めたもので、医師・看護師・学生によるチームが１班４～５日を担当し、夏山シーズンの１ヶ月間交代で診療にあたる。臼杵医師は学生の時に初めて参加し、その後運営の中心となった。1995年に香川医科大学（現香川大学医学部）に移籍した後は、登山者や岡山大学教程の変化を受け、香川大学学生の運営参加も実現させた。毎夏50名程の受診者を診療するが、診察費・薬品代共に無料である。一方、全国23の山岳診療所に呼びかけ、情報共有のためにデータを収集、その情報は診療所間で共有され、登山者講習等に用いられる他、スポーツ庁主催の山岳遭難対策協議会へも提供されている。

香川大学
医学部付属病院手術部

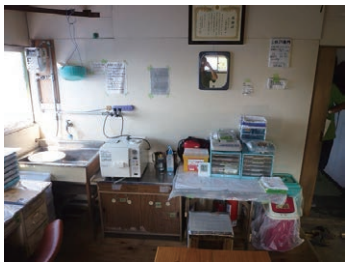
登山者の遭難報道は後を絶ちませんが、非日常的環境ゆえの発病や様々な程度の事故による外傷の数は桁違いで、重傷の搬送数も増加し続けています。このような中、国内の山岳地帯（多くは標高2,000m 以上）には夏季のみ開設する23の簡易診療施設があり、年に3,000人近くを診療しています。診療費は、私が参加している三俣診療所のように診察から投薬・処置まで完全に無料の所、薬等の実費のみ請求する所など様々ですが、何処も医師等がそこまで通う旅費や滞在費は全て自己負担で、当然無給、必要経費は寄付金や参加者自身の負担で何とか捻出している状況です。三俣は長野・富山・岐阜３県の県境で、北アルプス最奥の地とも言われますが、医師達も登山口から10時間以上、時には悪天候の中を診療の不足物品等を背負って登高しています。診療所が開設された昭和39年以来、参加医師は多忙な日常業務の中で漸く得た１週間程の夏休みの全てを、ここでの診療活動と入下山にあててきました。私の初参加は学生時代ですが、山や山を愛する人達、そしてこの活動が好きになって通う内、気付けば40年以上が経っていました。

この度、その診療活動と、類似施設のデータを集計してスポーツ庁等関係機関に報告していることが評価され、この名誉ある賞を戴きましたが、今回の受賞は、私個人というより、このような活動全体が戴いたのだと思っています。何故なら、休暇から入下山に必要な日を差し引くと医師一人の診療期間は長くて５日程で、一夏（３～40日）の診療には最低でも15名程の医師が必要なこと、多くの診療所が50年以上の歴史を持つことから考えると、これまでのべ２万人以上の医師がこの活動を支えてきたことになるからです。そして、看護師や医学生も入れると全参加者数は10万人を超えますので、極めて長期の壮大な医療ボランティア活動と言えます。

ただ、こう書きますと、随分と大きな事の様ですが、単に自分が好きになったこと

を続けて来ただけでもあります。今回、授賞式に出席して、世の中には他の人の為に我々よりも遥かに苦労をしておられる方や、社会の本当に細かな片隅にまで光を当てようとしておられる方が沢山いらっしゃることが分かり、自分などまだまだ甘いと感じました。しかし、お認めいただいたことを励みとして、私だけでなく同様の活動をしている仲間を鼓舞し、今後も一人でも多くの「今、困っている方」のお役に立ちたいと思っております。

▲ヘリコプターで搬送するため患者を移動させています



▲診療所

# 京都わらび会

京都府

京都府内で1980年に設立された稀少難病患者と児と家族で希少なため患者会のない疾患を対象とする日本で唯一の任意団体。現在24種類の疾病患者や家族87人が参加している。「独りぼっちにさせない」をスローガンに、福祉面、最新医療情報の紹介、電話相談、患者がひきこもりにならないよう遠足などの各種イベントも開催する。また研究を進めて貰えるように各医療機関、各種団体、厚生労働省などへの要望活動も行っている。赤いヘルプマーク（外見からわからなくても援助や配慮を必要としている人が、周囲の人に知らせるマーク）の運用の働きかけを市や府、交通機関にも行っている。

会　長
**岸　十九恵**

この度「第49回社会貢献者表彰」という立派な名誉ある表彰を賜り光栄に思います。安倍昭恵会長様から手渡しして頂きました賞状に感無量です。私達稀少難病患者･児･家族の会に目を向けていただき感謝しております。

1980年に設立しました京都府で同病患者が少なくて、患者会が出来ない稀少難病を対象とした全国的にも珍しい患者会です。現在24疾患87人と賛助会員・ボランティアのわらびもち15人で構成しています。諸先輩方の涙あり・笑いありの37年間の悲喜こもごもな思いを、しっかりと受け止めて、会員さんに寄り添った手作りの活動を継続しております。

京都わらび会の「ひとりぼっちにさせない」想い、日頃からあまり外出されない方に、家から一歩出て頂く、そのために京都市重度障害者移動支援事業のリフト付き福祉バスを利用して春の交流会と秋の交流会を実施しています。この秋の交流会ではリニューアルした京都動物園の見学・ランチはホテル平安の森「洛」にて美しい、おいしい料理を堪能しました。会員さんの中には「外出して食事するのは何年ぶりだろう」「みんなで一緒に食事するのが、こんな楽しいとは思わなかった」とおっしゃる方もいらっしゃいました。京都府難病支援センターのボランティアさん２人が大活躍してくださったお陰で、車椅子の方々も安心して楽しんでおられました。ランチの後は、東山将軍塚の青龍殿、夢舞台の京都が一望できる大パノラマと紅葉を満喫しました。初参加の方もすっかり打ち解けて身内みたいな大家族!! 福祉バスの中はみんなの笑顔が溢れていました。名残惜しい想いを胸に解散！

そして、同病者同士の交流会は、毎回、開催日などを各新聞社に掲載して頂き、実施しています。「こんな会があったのだ。探していました。」と初めての方もお見えになります。新聞の力は大きいと感じています。同じ病気同士、病気の受け入れ方・付

き合いかた・日常生活・制度の利用・主治医に対する患者としての心得・工夫等々を話題にすることにより、力強い絆が生まれ、メールアドレス交換等をしてみんな笑顔で「またねー」いつも次につながる散会です。

福祉情報・最新医療情報の提供、厚生労働省への要望書・署名活動も活発にしています。京都難病連の力をお借りして、同病者が悩み相談を聞く「ピア相談会」「電話相談」も講習会を受けて傾聴を軸に頑張っています。

また、赤い「ヘルプマーク」の普及啓発活動もしています。外見ではわからない内部疾患・妊娠初期等、配慮が必要としている方が周囲に知らせるヘルプマークの運用について、京都府・市・各交通機関に働きかけて少しずつその活動が実って来ています。

JPA 日本難病・疾病団体協議会の伊藤たてお様のお言葉である「患者会は楽しくなければ患者会でない」、京都わらび会東屋日出男前会長の言葉である「病気になったのは不運だが、不幸ではない」。この２つの言葉を心に刻み、病名・環境・生活も異なりますが、みんなが地域で安心して暮らせる社会になるように希望を持ち、みんなで楽しいわらび会を一歩一歩前進させていきたいと思います。

いろいろな支援団体様と前夜の交流会、当日の祝賀会で沢山の交流が出来ました。「困ったら何時でも連絡ください」。お医者さんも「可能な限り応援する」力強い言葉を頂き名刺交換をさせて頂きました。

感動の中、夢のような帝国ホテルでの表彰式典二日間でした。

関係者各位の皆さま，優しい細やかなご配慮賜り感謝申し上げます。

会長　岸　十九恵

▲京都市バス・地下鉄にヘルプマークを張って頂く

▲難病患者医療講演・相談会

▲福祉バス利用交流会　東映映画村

▲医療講演会

# SIAb.（Survivors of Incestuous Abuse）

東京都

近親姦虐待被害の当事者（以下当事者）同士がつながり、「お互いの回復と成長を語り、学びあいながら、健康的な社会生活を取り戻していこう」をスローガンに、Self Help（自助グループ）事業を主軸にした非営利活動をしている任意団体。当事者自身が主体となって、近親姦虐待被害に特化したピアサポートを2013年の発足以来行っている。さらに活動のもう一方の軸として、同年７月からは、この問題に対する啓蒙活動を行うSIAb. Projectを始動し、家族や支援者、治療者、援助職および加害者を含む社会全体に向けて情報発信の活動も行っている。

約５年前の発足当時､｢近親者からの性虐待問題｣に特化したグループは皆無でした。見過ごされ、ダブー視されがちなテーマを掲げた私たちの、このような陽の当たらない活動に光を当てていただき、あたたかい拍手をいただけたことに感謝いたします。

授賞式では、全国で活躍される個人や団体の方々の活動を知り、大いに刺激を受けました。一方で､｢社会に貢献しよう」と活動されている方と､被害を受けて育ち､｢生きるための必要」としてグループに繋がった自分たちとが、このような晴れがましい場を共にすることへの戸惑いもありました。しかし､｢人の喜びが自分の喜び」とおっしゃる他の受賞者の方の思いに触れ、他者のために尽力する思いと、「これ以上被害者を出したくない」という私たちの気持ちの、緩やかなつながりを感じることができました。また、地道でひたむきな活動の数々に触れ、微力ながらも末長く活動を続けていくことの大切さをあらためて感じ、身の引き締まる思いでした。

たくさんの方々を紹介していただき、繋がることができたことも得難い体験です。とくに更生保護施設や自立支援施設の方々からは深い関心を寄せていただき、性虐待の問題がめずらしいものでないこと、その影響の深刻であることを再認識しました。

性暴力に関する刑法改正に見るように、社会は少しずつですが、確実に変化しています。本来は、私たちのような団体が必要無い社会が望ましいのです。しかし現実に被害がある限り、私たちは被害体験を無かったことにして生きるのではなく、それに向き合い、自身の人生の中に位置づけていくためのピアサポートの場が、ぜひとも必要だと感じています。それも、もっと多くの場が、できれば全国どこにいてもアクセスできるくらい身近に。

声を上げることのできない潜在的被害者は少なくないはずです。安心して自己開示できる場をもつことで、被害当事者が孤立しない社会になることを願っています。

最後になりましたが、美味しいお料理もごちそうさまでした！「副賞は、ご自分たちのためにお使いください」とのお言葉通り、さっそくホテルのラウンジでお茶をいただきながらミーティングを行い、仲間とともにこの日の感想を述べ合いました。以

上の感想は、それらをまとめたものです。

さまざまに貴重な体験と時間をいただきましたこと、重ねてお礼申し上げます。

▲ホームページからのこの問題に関する様々なを情報発信

▲支援職の方々との勉強会や交流会に参加

▲Art Work Group（草の根市民活動ぐらん助成活動）仲間の作品 2017.09.24

▲社会に向かって当事者の声を届ける活動

# NPO 法人 日本ウミガメ協議会 付属 黒島研究所

沖縄県

沖縄県竹富町黒島にサンゴ礁生物の調査などを目的に1975年に設立された研究所で、島の自然と文化を調べている。近年では、啓発活動にも力を入れ研究所内に常設の展示施設を設け、博物館的な役割も担っている。また、全国の大学から研修や学芸員実習を受け入れる学びの場ともなっている。2011年の東日本大震災の影響で減少した観光客と伝統漁法の衰退問題を解決しようと、観光客に向けてウミガメの標識放流調査（標識札を付けて放流し、成長や回遊経路などを調査する）を「ウミガメ勉強会」として開催している。勉強会で放流するウミガメを伝統漁法「かーみーかけ」で確保することで、ウミガメ漁も継続されている。今では毎年約1,000人が勉強会に参加し、人口200人の離島における観光業や地域活性にも貢献している。

（推薦者：早稲田大学環境総合研究センターW-BRIDGE）

所　長
**若月　元樹**

きっかけは東日本大震災でした。震災直後、沖縄の島や海を楽しむことは「不謹慎」だったのです。あれほどの大きな犠牲ですから当然です。

私たちが暮らす黒島は人口約200名に対し民宿が10軒、飲食店が５軒ありました。すべてが観光客相手の家族経営です。春休みや GW も観光客数は回復せず、一番にぎわう夏休みに見切りをつけ、島外へ出稼ぎに出る父親が現れ、ショックを受けました。なぜなら、その先には、島外での再出発があり、学校存続の危機や島の衰退があるからです。

窮状を打開すべく「うみがめ勉強会」を開催しました。これまで細々と続けてきた放流調査を夏休みに毎日公開で実施したのです。「かーみーかけ」と呼ばれる漁法で漁師さんにウミガメを確保してもらい、伝統漁法の継続にも貢献しています。

店主から「今日のお客さんは勉強会の参加者だけだった」と聞く日もあり、夏休み以降も続けました。職員２名での実施は大変でしたが、参加者の笑顔や今回ご推薦を頂いたブリヂストン様や早稲田大学様をはじめとする様々な方の温かいご支援、学生たちの協力に支えられました。船会社様にも集客等でご協力頂き、みんなが応援してくれる「うみがめ勉強会」となりました。この度の受賞は今後も継続する上で大きな勇気となりました。

「授賞式にはぜひご家族で」というお言葉に甘え、幼児３名を連れて家族で参加しました。翌日には東京ディズニーランドへも足を伸ばしました。「上の子の小学校入学前には…」と心に秘めてはいたものの、入園式や運動会、おゆうぎ会ですら１度も参加したことがない、家族の犠牲の上に成り立った活動の現状では不可能でした。飼育生物も多数おり、職員２名で行くべきかすらも迷っていた所、「東京の授賞式に行くか迷っていると聞いたのですが…」と研修生として来た経験がある学生たちが名乗

りを挙げ、留守を守ってくれました。

今回の受賞式参加をきっかけに「休まない」とか「365日働いている」と心配されていることを知りました。好きでやっていた活動とは言え、「幸せ」そうに見えていなかった点は大いに反省するところです。

内館審査委員長が最後に述べられた言葉が心に深く染み入っています。「うみがめ勉強会」の参加者から「子どもがずっとウミガメの話をしています」といった内容の手紙が届く度に「やって良かった」と感じます。授賞式から帰ってきた我が家では、子どもたちが目を輝かせ、ずっと東京の話をしています。「行って良かった」と感じられるご褒美をありがとうございました。会場で騒いでいた子どもたちは我が子です。お騒がせ致しまして失礼いたしました。

所長　若月　元樹

▲所長の若月が勉強会の意義を参加者に説明

▲研修生が剥製を利用してウミガメについて解説

▲参加者とともに標識放流するウミガメを選ぶ

▲放流の前にウミガメの大きさを計測

▲ウミガメの放流。標識放流調査のスタート

▲W-BRIDGE の支援により衛星追跡発信機による調査を実施

# 株式会社　クラロン

福島県

福島県福島市に1956年に故田中善六氏によって創業されたスポーツウェア製造販売会社。「職業を通じて社会に奉仕する」をモットーに、創業以来、障がい者、高齢者、女性の正規雇用に積極的に取り組んでいる。特に社員134人の内、36人が障がい者で、全員正社員として迎えている。県内トップの実雇用率。また、女性社員が100人。60歳以上の社員は24人、最高齢は81歳の女性営業課長。60歳の定年以降65歳まで再雇用制度は勿論、その後も健康で勤労意欲のある社員は、希望するまで一年毎に引き続き延長勤務が可能。国籍、年齢、障がいなどにこだわりのない雇用により会社を運営している。（社員数等2017年９月時点の数字）

（推薦者：特定非営利活動法人　チームふくしま）

代表取締役会長
**田中　須美子**

29年６月、社会貢献支援財団の専務理事、天城一様が社会貢献者賞の候補企業として当社に訪問頂いた時、実は当社が期待に添えているか、又、資格があるかと不安な思いでございました。そして９月、正式に第49回社会貢献者表彰の受賞通知書が届いた時は、信じられない喜びでございました。表彰式は厳粛なうちにも温かい雰囲気の中で安倍昭恵会長より表彰状を頂いた時は緊張と感謝で一杯でございました。そして、頭の中は、今の基礎を築いてくれた亡き主人と従業員の顔が去来いたしました。

当社は1956年、亡き主人と共に17人の従業員でスポーツウェアの製造販売会社として創立しました当初から障がいを持つ子が３人入社しておりましたから障がい者雇用は自然でした。現在は、従業員135名中、重度の11名を含む36名の障がい者、女子は100名、高年齢者は60歳以上が22名で最高齢は82歳の女性営業課長です。納入先は、東北６県と北関東の学校約1,100校、その他、病院、企業等です。

昭和46年、主人が支援学校、養護学校、特殊学級の子どもたちの就労を図ることを目的として各企業と協力し、障がい者の雇用促進をめざし「福島職業能力開発研究協議会」を設立、現在46年を迎えて尚活躍しております。

又、各中学校より１週間から２週間程度、職業実習生として受け入れを行い、障がいを持つ子どもたちが実際に社会へ出る時、職業の選択や心構え等の参考にして頂いています。小学３年生の社会科副読本（市教育委員会編）の「工場のしごと」に当社工場が５頁にわたり掲載されていることもあり、見学は毎年10校ほど見学に来ています。

昭和31年創業以来、二人三脚で共にこのクラロンを立ち上げて来た主人が、平成14年に突然亡くなりました時、私は絶望のあまり、立ち上がることが出来ず、自分自身も病に倒れ会社を続けて経営してゆく力を失いました。しかし、数か月後、意を決して社長を引継ぎ、工場に出勤した時、Ｋ君が駆け寄ってきました。Ｋ君が入社したのは平成３年で応募書類には「自閉症的傾向があり、情緒不安定で時々奇声をあげ職場内では理解が必要である」と書かれてありました。以前の就職先もこのことで解雇さ

れたとの事で、かねてから障がいを持つ子どもたちの就職に熱心な先生の熱意に動かされ採用しました。彼の仕事は仕掛製品の整理をしてもらう事にしました。しかし、やはり一番問題になったのは何度となくあげる奇声、それも工場中に響く大声と踊る動作に一同が仕事を中断する様な有様でした。

そこで、主人は名案を考えました。それは倉庫に入って２人だけで大声を出し合うということでした。すると、彼はさっぱりした様子で仕事に戻るという動作を２年間続けました。其の後、奇声をあげることも踊ることも徐々になくなったのです。そして、今度は新たな動作が生まれました。それは主人が精神的に落ち着かせる為に思い付いたのですが、彼を抱き寄せトントンと肩を叩いてあげる事でした。彼は主人を見つけると走って来て催促し、肩を叩いてあげると、ニコニコして仕事に就いておりました。このことは、主人が入院するまで続きました。私はその動作はそれで終わったと思ったのです。ところが、彼は私を見つけると、肩々と言いながら寄って来て突然大きな声で「社長さん頑張って」と言ったのです。この子からこの様な優しい励ましの言葉をかけられると思わなかった私は、一瞬びっくりして立ち止まり、そして我に返って主人の思いをこめて彼の肩を「ありがとう」と叩いてあげました。この子は自分を可愛がってくれた社長が亡くなったこと、主人を亡くした私の哀しみをどう慰めたらよいかを彼なりに考えていて私を待っていてくれたのだと思うと、その途端胸が熱くなって涙が止まりませんでした。その時、私は亡くなった主人の思いは、この子に伝わっている。今、彼を通じて主人の命は間違いなくＫ君の心の中に成長していることを感じました。そして、私は立ち直ることが出来ました。この子どもたちのお陰です。私がこの子どもたちを助けていたのは間違いで、この子どもたちから癒され守られ生きているのは私の方だったと気が付いたのです。

現在、故主人の理念である「職業を通じて社会に奉仕する」をモットーとし障がい者・女性・高齢者にやさしい会社、楽しく働くことの出来る会社を目指して頑張っております。

ありがとうございました。

代表取締役会長　田中　須美子

▲クラロン外観

▲工場内全景

▲工場内

▲刺繍室

# 古谷　滋子／古谷　寿彦

あそび山・山守り
**古谷　滋子**

あそび山・山守り
**古谷　寿彦**

高知県

妻の滋子さんは、定年後は子どもの未来のために、山や森など自然の中での遊びを通して、様々なことを学ぶ遊びの場を造ることをライフワークにしたいと夫の寿彦氏に相談。少年野球の監督をしていた夫も大賛成し、高知市福井町に1,600㎡の山を購入。ボランティアと自分らの手で、放置されていた山野を整備し、芝滑りやロープ登り等、手作りの遊び場を造り、2005年から、近隣の保育園･幼稚園･小学校の子どもたちに開放している。また6名のボランティアと共に、毎月イベントを開催、昔の遊び道具～竹とんぼやしゅりけん、みずてっぽう、竹馬などを手作りし、子どもたちが創意工夫して、体を触れ合わせながら遊べる環境を提供している。また、高知県の民話を紙芝居で見せるなど、毎回30～80人の子どもと保護者が参加し好評を得ている。事故が起こった時の責任問題という不安もあったが、子どもたちが生き生きと遊べる私設の「あそび山」を造る決断をして13年目を迎えている。

（推薦者：川北小・中学校卒業生有志）

大きな励ましとなる賞を戴いたうえに心のこもった式典、衷心より御礼申し上げます。

山林が84％を占める高知県でも子どもの外遊びは益々少なくなっています。私たちの子どもの頃は「山をたつくる」と言って、羽目を外すぐらいに元気に山など駆け回ったものです。また、年齢を超えた集団での遊びの体験は心身に刻まれ、きっと生きる力になります。

退職が近くなったある日、子どもたちにそんな遊びの場を造りたいと話したところ、「退職してから山を探しよったら遅い。僕が探しよっちゃろ」と、既に退職していた夫の協力で実現に至り、退職の半年前に「あそび山」をオープン、今13年目を迎えています。

広さは約1,700㎡、山の整備から遊びの仕掛けまでほぼ手造りです。木に垂らして林に誘導するロープ、「アッアア～」と言いたくなるようなターザン綱、空中を飛ぶようなタイヤのブランコ、丸木に漁網を張ったトランポリンのような基地、グラスボートで滑る坂、３箇連結した大穴、大小様々な木の端切れ、土遊びの山、大縄跳びや相撲もする芝生などで遊びを誘います。蝶やとんぼ、虫に興味のある子は網を放しません。そんな中で自分の遊びが拡がるのでしょう、結構長時間遊んでいます。

開設で一番ネックになったのは事故が起きた時の責任です。随分悩み相談もしました。が、子どもは兄・姉ちゃんのすることをしっかり見て、自分にできるか見極め、やがて挑戦します。出来ない事には意外と慎重です。そのことが判って幾分か気が楽

になりましたが、事故に繋がらない整備、遊びの遠見は怠れません。

ほぼ毎月の行事「わんぱくチャレンジ」は、もう12周目となります。昔あそびの竹馬、竹てっぽう、ちゃんばらごっこ等の遊びは勿論、「焼き芋・焼き卵を作って焼き芋ランチ」(11月)、自然の七草を摘み七草がゆを炊く（２月）ことは恒例のメニューです。遊んだ後の紙芝居では読みたい子が手を上げます。団体等の利用も歓迎で、周辺の保育園、幼稚園、小学校、ママの団体などがよく来てくれます。

ただ一つ残念に思っていることは、「高知県の子どもは、みんな山をたつくっちゅう！」と言えるように、子どものあそび場が里山に拡がることを期待していましたが、諸事情もあってそこまでの活動に至っていない事です。

受賞を機に、また新鮮な気持ちで子どもたちと遊ぼうと思います。

あそび山・山守り　古谷　滋子

▲紅白対抗で「ちゃんばらごっご」勝までやりたい！

▲一番の人気は「山すべり」かな　今は芝生も切れてしまったよ

▲「漁網の基地」も大好き！　皆でくっつきあうよ

▲保育園がきたよ　まず「山登り」がしたい！

▲「木のブロック」時には大傑作が出来てる！

▲恒例の「焼き芋ランチ」卵も焼くよ！

# 特定非営利活動法人
# 全国視覚障害児童・生徒用教科書点訳連絡会

東京都

東京都新宿区の日本点字図書館内に拠点を置き、一般の小中学校で学ぶ視覚障害児童・生徒の教科書・教材を点字化する活動を行っている。盲学校で使用する教科書は、点字出版所が作成した全国統一の一種類だが、一般校では地域によって教科書が違い、それぞれの児童・生徒独自の多種多様な教科書を点字化せざるを得ない。点字出版所だけでは対応が難しく、点字出版施設や点訳ボランティア団体などが集まり2005年に会の発足に至った。毎年、点字教科書作成の実態調査も行い、２回の研修セミナーも開催している。現在30以上の施設やボランティア団体などが会員となり活動している。

（推薦者：社会福祉法人　ぶどうの木ロゴス点字図書館　高橋秀治）

理事長
**田中　徹二**

第49回社会貢献者表彰式典におきまして、私どもが表彰されましたことはたいへん光栄であり、今後の活動にとって大きな励みになりました。正に私どもと同じく表彰されました他団体のように、私どもも功績を挙げながら、社会的に報われる機会の少ない団体そのものでございます。このような私どもの活動に、灯をあててくださいましたことに感謝いたします。

人が成長し、社会の中で業績を挙げるためには、その基礎にしっかりした教育があることは疑う余地がありません。視覚障害児童・生徒にとっても、それは同じことです。

その教育で、欠かすことができないのは教科書の存在です。全国にある盲学校では文科省が製作費を出し、プロの点字出版所が作った点字教科書が提供されています。

しかし、国連の障害者権利条約で保証されているインクルーシブ教育で教育を受けている視覚障害児童･生徒には、点字教科書はまったく保証されていないというのが、わが国の実情です。盲学校の場合は、たくさん出版されている検定教科書の中から１冊を選び、それを点字化して全国で使用しています。しかし、インクルーシブ教育ではそうはいきません。地域の教育委員会が、それぞれ独自に選んだ教科書が使われています。盲学校用に選ばれた教科書と一致する例は、ごくわずかです。したがって、それぞれ個々に点訳してもらわなければなりません。その点訳を引き受けてくださっているのがボランティアです。

それに対し、文科省はわずかな謝金をボランティアに支払うだけで、抜本的な対策は講じていません。公的な保証が大前提になる教育の分野で、ボランティアの善意に

頼らなければならないというのは、あまりにも大きな矛盾と言えます。しかし、国が放置しているからといって、インクルーシブ教育で学ぶ盲児童・生徒の点字教科書を放っておいていいわけがありません。矛盾を抱えながらも、インクルーシブ教育を成功させようと努力しているのが私どもです。皆様のご理解、ご援助を切にお願いいたします。

理事長　田中　徹二

▲教科書の点訳風景　つつじ点訳友の会

▲教科書の点訳の様子　つつじ点訳友の会

▲2017.6.17　田中理事長の挨拶 29年度第一回セミナー
テーマ「教科書を支えるソフトと点字プリンタ」

▲2015,11.28　27年度第二回セミナー
テーマ「USB を用いた中学英語教科書製作に向けて」

▲2016.11.19　28年度第二回セミナー
テーマ「今一度、社会の地図を考える」

# 年度別表彰分野・受賞者数の実績

| 年／回<br>分野 | 1回<br>昭46 | 2回<br>47 | 3回<br>48 | 4回<br>49 | 5回<br>50 | 6回<br>51 | 7回<br>52 | 8回<br>53 | 9回<br>54 | 10回<br>55 | 小計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人命救助等 | 93 | 203 | 156 | 157 | 213 | 197 | 235 | 255 | 230 | 183 | 1922 |
| 国際社会への貢献 | | | | | | | | | | | 0 |
| 青少年育成・スポーツの振興 | 14 | 21 | 33 | 101 | 111 | 95 | 97 | 81 | 75 | 76 | 704 |
| 社会福祉への貢献 | 62 | 58 | 82 | 149 | 140 | 200 | 149 | 114 | 102 | 119 | 1175 |
| 文化の振興 | | | | 3 | 7 | 11 | 5 | 9 | 11 | 11 | 57 |
| 地域社会への貢献 | 14 | 18 | 12 | 14 | 26 | 19 | 20 | 15 | 12 | 14 | 164 |
| 運輸交通への貢献 | 23 | 15 | 16 | 24 | | 43 | 66 | 57 | 55 | 52 | 351 |
| その他 | 34 | 35 | 87 | 97 | 114 | 95 | 105 | 135 | 139 | 105 | 946 |
| 小計 | 240 | 350 | 386 | 545 | 611 | 660 | 677 | 666 | 624 | 560 | 5319 |
| 開催日 | 3/23 | 11/10 | 10/26 | 9/26 | 12/10 | 11/5 | 11/8 | 11/7 | 11/7 | 11/21 | |
| 式典会場 | ①ホテルニューオータニ | | | | ②笹川記念会館 | | | | | | |

| 年／回<br>分野 | 11回<br>昭56 | 12回<br>57 | 13回<br>58 | 14回<br>59 | 15回<br>60 | 16回<br>61 | 17回<br>62 | 18回<br>63 | 19回<br>平元 | 20回<br>2 | 小計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人命救助等 | 195 | 208 | 177 | 198 | 274 | 193 | 106 | 127 | 89 | 98 | 1665 |
| 国際社会への貢献 | | | | | | | | | | 19 | 19 |
| 青少年育成・スポーツの振興 | 81 | 93 | 89 | 78 | 92 | 117 | 22 | 24 | 26 | 26 | 648 |
| 社会福祉への貢献 | 95 | 112 | 124 | 109 | 104 | 103 | 38 | 38 | 46 | 57 | 826 |
| 文化の振興 | 16 | 13 | 17 | 20 | 19 | 12 | 9 | 7 | 13 | 8 | 134 |
| 地域社会への貢献 | 15 | 12 | 12 | 15 | 8 | 13 | | 3 | 7 | 11 | 96 |
| 運輸交通への貢献 | 42 | 40 | 38 | 45 | 35 | 31 | 55 | 54 | 69 | 76 | 485 |
| その他 | 96 | 95 | 104 | 94 | 86 | 56 | 57 | 48 | 39 | 10 | 685 |
| 小計 | 540 | 573 | 561 | 559 | 618 | 525 | 287 | 301 | 289 | 305 | 4558 |
| 開催日 | 11/5 | 11/30 | 11/16 | 11/6 | 11/20 | 11/21 | 11/10 | 11/8 | 11/8 | 10/9 | |
| 式典会場 | ②笹川記念会館 | | | | | | | | | | |

| 年／回<br>分野 | 21回<br>平3 | 22回<br>4 | 23回<br>5 | 24回<br>6 | 25回<br>7 | 26回<br>8 | 27回<br>9 | 28回<br>10 | | 小計 | 受賞者合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人命救助等 | 101 | 82 | 34 | 15 | 47 | 21 | 27 | 16 | | 343 | 3930 |
| 国際社会への貢献 | 13 | 17 | 14 | 4 | 8 | 5 | 5 | 6 | | 72 | 91 |
| 青少年育成・スポーツの振興 | 40 | 54 | 44 | 29 | 22 | 25 | 28 | 32 | | 274 | 1626 |
| 社会福祉への貢献 | 64 | 75 | 68 | 28 | 36 | 37 | 34 | 42 | | 384 | 2385 |
| 文化の振興 | 11 | 15 | 10 | 3 | 8 | 10 | 10 | 12 | | 79 | 270 |
| 地域社会への貢献 | 12 | 9 | 4 | 7 | 14 | 20 | 19 | 19 | | 104 | 364 |
| 運輸交通への貢献 | 83 | 80 | 49 | 18 | 14 | 18 | 16 | 20 | | 298 | 1134 |
| その他 | 13 | 7 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 27 | 1658 |
| 小計 | 337 | 339 | 230 | 104 | 149 | 136 | 139 | 147 | | 1581 | 11458 |
| 開催日 | 11/7 | 11/5 | 11/1 | 11/7 | 11/1 | 11/12 | 11/13 | 11/9 | | | |
| 式典会場 | ②笹川記念会館 | | ③ホテル海洋 | | | ④東京全日空ホテル | | | | | |

| 年／回<br>分野 | 29回<br>平11 | 30回<br>12 | 31回<br>13 | 32回<br>14 | 33回<br>15 | 34回<br>16 | 35回<br>17 | 36回<br>18 | | 小計 | 受賞者合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一部門<br>緊急時の功績 | 6 | 5 | 6 | 8 | 5 | 4 | 5 | 2 | | 41 | |
| 第二部門<br>多年にわたる功労 | 14 | 15 | 11 | 12 | 13 | 11 | 11 | 18 | | 105 | |
| 第三部門<br>特定分野の功績 | | 4 | 7 | 8 | 8 | 11 | 9 | 9 | | 56 | |
| （海の貢献賞） | | | 2 | 1 | 3 | 3 | 4 | 2 | | 15 | |
| （国際協力） | | 2 | 2 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | | 7 | |
| （ハッピーファミリー） | | 0 | 0 | 2 | 1 | 3 | 1 | 2 | | 9 | |
| （21世紀若者） | | 2 | 3 | 4 | 4 | 3 | 4 | 5 | | 25 | |
| こども読書推進賞 | | | | | 3 | 3 | 3 | 3 | | 12 | |
| 小　計 | 20 | 24 | 24 | 28 | 29 | 29 | 28 | 32 | | 214 | 11672 |
| 開催日 | 11/10 | 11/22 | 10/29 | 11/19 | 11/ 4 | 11/15 | 11/16 | 11/20 | | | |
| 式典会場 | ④ | ① | ④東京全日空ホテル | | | | | | | | |

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。
平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。
平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。
平成15年度よりこども読書推進賞を新設。

| 年／回<br>分野 | 37回<br>平19 | 38回<br>20 | 39回<br>21 | 40回<br>22 | 41回<br>23 | 42回<br>24 | 43回<br>25 | 44回<br>26 | 45回<br>27 | 小計 | 受賞者合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人命救助の功績 | 9 | 13 | 11 | 11 | 8 | | 3 | 9 | 0 | 64 | |
| 社会貢献の功績 | 33 | 35 | 34 | 34 | 39 | | 36 | 35 | 47 | 293 | |
| 特定分野の功績<br>（海の貢献賞） | 1 | 2 | 3 | 5 | 2 | | 2 | 0 | 0 | 15 | |
| 海への貢献の功績 | | | | | | | | 3 | 2 | 5 | |
| こども読書推進賞<br>表彰式：6／26<br>会場：虎ノ門パストラル | 1 | | | | | | | | | 1 | |
| 東日本大震災における貢献者表彰<br>表彰式：5／1<br>帝国ホテル | | | | | | 128 | 12 | | | 140 | |
| 小　計 | 44 | 50 | 48 | 50 | 49 | 128 | 53 | 47 | 49 | 518 | 12190 |
| 開催日 | 11/13 | 11/17 | 11/24 | 11/16 | 11/21 | 5／1 | 11/25 | 12／1 | 11/30 | | |
| 式典会場 | ④ ANA インターコンチネンタルホテル | | | | ⑤帝国ホテル | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | 12190 |

平成19年度より分野名を変更。こども読書推進賞は最終回。
平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。
平成26年度より特定分野の功績（海の貢献賞）は海への貢献の功績に変更。

| 年／回<br>分野 | 46回<br>平28 | 47回<br>28 | 48回<br>29 | 49回<br>29 | 50回<br>30 | 51回<br>30 | 52回<br>31 | 53回<br>31 | 54回<br>32 | 小計 | 受賞者合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人命救助の功績 | 9 | | 11 | | | | | | | 20 | 20 |
| 社会貢献の功績 | 11 | 51 | 17 | 53 | | | | | | 132 | 132 |
| 小　計 | | | | | | | | | | | 152 |
| 開催日 | 7／1 | 11/28 | 7／21 | 11/27 | | | | | | | |
| 式典会場 | ⑤帝国ホテル | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | 12342 |

平成28年度より年に２回式典を開催。

# 都道府県別受賞者内訳

| 県　名 | 第48回までの累計 | 第49回受賞者 | 受賞者数 |
|---|---|---|---|
| 北海道 | 652 | 3 | 655 |
| 青森県 | 180 | | 180 |
| 岩手県 | 214 | | 214 |
| 宮城県 | 386 | 2 | 388 |
| 秋田県 | 124 | | 124 |
| 山形県 | 155 | | 155 |
| 福島県 | 176 | 1 | 177 |
| 茨城県 | 199 | 1 | 200 |
| 栃木県 | 146 | 1 | 147 |
| 群馬県 | 243 | | 243 |
| 埼玉県 | 469 | 1 | 470 |
| 千葉県 | 398 | 1 | 399 |
| 東京都 | 1,158 | 6 | 1164 |
| 神奈川県 | 617 | 4 | 621 |
| 新潟県 | 260 | | 260 |
| 富山県 | 144 | | 144 |
| 石川県 | 143 | | 143 |
| 福井県 | 205 | | 205 |
| 山梨県 | 134 | | 134 |
| 長野県 | 199 | 1 | 200 |
| 岐阜県 | 215 | 1 | 216 |
| 静岡県 | 310 | 1 | 311 |
| 愛知県 | 308 | 3 | 311 |
| 三重県 | 164 | | 164 |
| 滋賀県 | 98 | | 98 |

| 県　名 | 第48回までの累計 | 第49回受賞者 | 受賞者数 |
|---|---|---|---|
| 京都府 | 207 | 2 | 209 |
| 大阪府 | 482 | 5 | 487 |
| 兵庫県 | 514 | 3 | 517 |
| 奈良県 | 111 | | 111 |
| 和歌山県 | 143 | 1 | 144 |
| 鳥取県 | 91 | | 91 |
| 島根県 | 111 | | 111 |
| 岡山県 | 306 | | 306 |
| 広島県 | 410 | 3 | 413 |
| 山口県 | 272 | | 272 |
| 徳島県 | 176 | | 176 |
| 香川県 | 195 | 1 | 196 |
| 愛媛県 | 150 | | 150 |
| 高知県 | 72 | 1 | 73 |
| 福岡県 | 545 | 1 | 546 |
| 佐賀県 | 128 | 2 | 130 |
| 長崎県 | 268 | | 268 |
| 熊本県 | 226 | 1 | 227 |
| 大分県 | 126 | 1 | 127 |
| 宮崎県 | 71 | 2 | 73 |
| 鹿児島県 | 140 | 1 | 141 |
| 沖縄県 | 160 | 2 | 162 |
| その他 | 88 | 1 | 89 |
| 合　計 | 12,289 | 53 | 12,342 |

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計
※県名は、受賞者居住地の都道府県名　その他は居住地が海外
※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計
※第48回の人命救助の功績の袋本将史氏（滋賀県）　伊藤修一氏（愛知県）　八木隆太郎氏（愛知県）は愛知県１件としてカウント

# 役員・評議員一覧

2017年12月１日現在

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 安倍昭恵 | 公益財団法人　社会貢献支援財団 |
| 副会長 | 内館牧子 | 脚本家、東北大学相撲部総監督 |
| 理　　事 | 犬丸徹郎 | 株式会社 和光　取締役執行役員 |
| 理　　事 | 澤井俊光 | 一般社団法人　共同通信社　外信部長 |
| 理　　事 | 永嶋久子 | 株式会社 資生堂　元取締役 |
| 理　　事 | 三谷　充 | 三谷産業株式会社　取締役会長 |
| 理　　事 | 屋山太郎 | 政治評論家 |
| 理　　事 | 天城　一 | 公益財団法人 社会貢献支援財団 |
| 監　　事 | 篠原由宏 | 篠原法律会計事務所、弁護士 |
| 監　　事 | 中村元彦 | 中村公認会計士事務所　所長 |
| 評議員 | 石井宏治 | 株式会社石井鐵工所　取締役社長 |
| 評議員 | 尾島俊雄 | 銀座尾島研究室　主宰 |
| 評議員 | 久米信行 | 久米繊維工業株式会社　取締役会長 |
| 評議員 | 今　義男 | 元公益財団法人　笹川平和財団　顧問 |
| 評議員 | 重村智計 | 早稲田大学　国際教養学部　教授 |
| 評議員 | 中島健一郎 | 株式会社 ACORN　代表取締役 |
| 評議員 | 広渡英治 | 公益財団法人　日本吟剣詩舞振興会<br>専務理事兼事務局長 |

## 公益財団法人　社会貢献支援財団

設　　立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋1-18-6　クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
Ｔ Ｅ Ｌ：03-3502-0910
Ｆ Ａ Ｘ：03-3502-7190
Ｕ Ｒ Ｌ：http://www.fesco.or.jp



## 社会貢献者の記録

2018年3月15日

発行者：公益財団法人　社会貢献支援財団

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION